

東京バッハ合唱団 月報

[第 668 号] 2018 年 2 月号

〒156-0055 東京都世田谷区船橋 5-17-21-101
Tel: 03-3290-5731 Fax 専用: 03-3290-5732 郵便振替: 00190-3- 47604
Mail: office@bachchor-tokyo.jp http://bachchor-tokyo.jp/

BACH-CHOR, TOKYO

Monthly Newsletter No. 668

February 2018

5-17-21-101 Funabashi,
Setagaya-ku, Tokyo

<創立 55 周年記念 第 115 回定期演奏会>

《ロ短調ミサ曲》公演と、指揮者大村恵美子氏に想う

佐治 順子

(宮城大学名誉教授・元世界音楽療法連盟臨床実践委員長)

J. S. バッハの《ロ短調ミサ曲》は、私自身、大学の西洋音楽史の授業で、《マタイ受難曲》や数々の教会カンタータと共にしばしば採り上げていた楽曲でありましたので、格別の親しみを携って拝聴させて頂きました。授業の時、音源を流す前に、必ず楽曲の構成とラテン語の歌詞の意味、オケ編成を説明していたことを思い出しますと、もし東京バッハ合唱団の演奏を教材にすれば、聴講者たちにはより分かり易い講義になったかもしれないと、今さらながら残念に思いました。

東京バッハ合唱団のことは学生時代から耳にしており、聴きに伺いたいと思いつつ、その機会を逸しておりました。考えてみれば、1962 年創立ということですので、私が東京芸大の楽理科生になる 1 年前から、既に合唱団の活動が始まっていたこととなります。しかも、その指揮者でおられる大村恵美子氏は、楽理科の大先輩でいらしたということで、学生内ではよく話題になっておりました。その一方で、私の専攻は、卒業論文、修士論文共に、西洋音楽史の中でもバロックの鍵盤音楽史、特に J. S. バッハと F. クープランのクラヴィーア古典組曲の研究に終始しておりましたし、卒業後も、バロック音楽専門の芸大教官と卒業生の勉強会で発足したバロック研究会に所属し、フーガやカンタータなどの共同研究にも加わっておりました（その中に『教会カンタータの成立と展開—バロック音楽の諸相—』、アカデミアミュージック出版、1995 年があ

ります)。それらのこともあったためでしょうか、実は、東京バッハ合唱団入団へのお誘いも何度か頂いたこともありましたが、結婚、子育て、勤務校の移動などの諸々の事情により、失礼してしまっていたという経緯がありました。そして、ようやく昨年 11 月 23 日の演奏会に聴きに伺うことができましたことは、永年の想いがはじめて達成できたような気持ちであります。その折には、演奏直後のお疲れにも拘わらず、大先輩の大村恵美子氏にお目もじでき、親しくお話しさせて頂きましたことを大変嬉しく思っております。

その日の演奏は、大村恵美子氏の指揮で、厳選された 4 人のソリストと管弦楽団、熟達した混声合唱団が、2 時間にも及ぶ大作品を、長い時間を感じさせることなく会場を静かな安らぎの音楽で満たしておりました。その要因の一つは、やはり母国語の訳詞であったためでしょうか。加えて、オルガンやオーボエ・ダモーレの響き、アルト歌手のピロードのような歌声も圧巻でありました。そしてバランスの良い演奏に仕上げる指揮者の采配と、団員の皆様との絆の強さが、半世紀以上も継続して演奏会を開催して来られた大きな要因であったことを確信いたしました。

東京バッハ合唱団は、創立当初から教会カンタータの邦訳演奏を続けていらっしゃいますが、さらに 2011 年からの創立 50 周年記念企画においては、《ロ短調ミサ曲》だけでなく、《マタイ受難曲》や《クリスマス・オラトリオ》、《ヨハネ受難曲》などの大作の邦訳での連続演奏にも挑戦なさったとのこと。その演奏が広く多くの人々の心に響く音楽を届けることができるのは、この合唱団が大切にされて来られた母国語の歌詞による演奏だからこそであると強く思いました。確かに、歌詞の意味を理解して聴くことができ、そして歌えることは、無理なく音楽が耳に入り込み易く、より身近に感じられるものです。私も、英国の大学院で音楽療

“絶賛”の 55 周年記念公演盤、発売！

《ロ短調ミサ曲》

【日本語演奏】

当日配布プログラム
添付

・ CD…2,500 円

(2 枚組)

・ DVD…3,000 円

・ Blu-ray…4,000 円

事務局(上記)まで
お申し込みください。
郵便振替用紙同封にて
送付致します。送料別。



月報 2 月号 CONTENTS

- ・ 地に平和——イルゼの誠 (大村恵美子) …… p. 2
- ・ “あしたに輝く妙なる星” とは何の星か？
(小海 基) …… p. 3

法を学んでいた時、その教科書を日本で音楽療法を学びたい人のためにと思い、帰国後直ぐに日本語の翻訳にとりかかりました (M. Pavlicevic 著『音楽療法の意味—心のかけ橋としての音楽—』、本の森出版、2002年)。しかし、日本語選びは大変難しい作業であったと記憶しています。ましてや、楽譜中の歌詞の翻訳は、決められた音数の中に原語の意味を的確に表現しなければなりませんので、高度な語学力だけでなく、作品の背景、歴史に関する深い洞察力も備えていなければならぬ難業です。兎にも角にも、その情熱に驚嘆いたすと共に、そのご苦勞は如何ばかりだったかのご推察申し上げます。

大村恵美子氏は、1962年から55年間、定期演奏会だけでも115回もの公演を継続して来られ、しかも日本語訳でのカンタータの演奏会は、今後も続くご予定とのことです。大村恵美子氏のあの穏やかな笑顔のどこに、そのエネルギーが潜んでいるのでしょうか？ 今後の演奏会を楽しみに心待ちにさせて頂くと共に、是非ともご健康には十分留意させて頂きたくらいと心から祈念してやみません。

地に平和——イルゼの誠

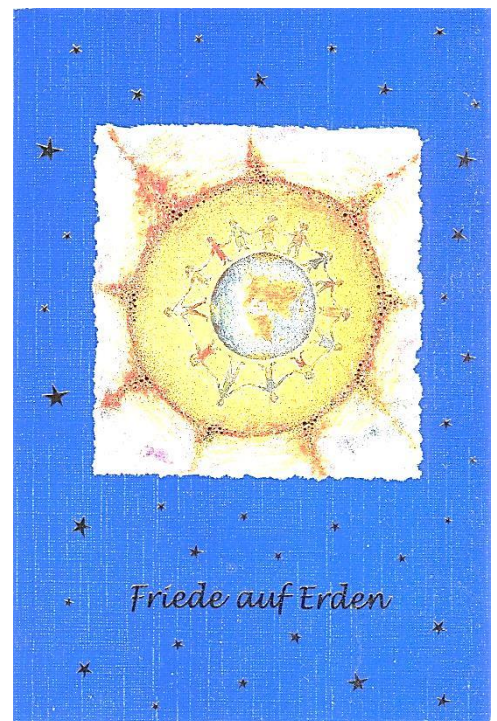
大村 恵美子 (主宰者)

昨2017年12月26日、ライプツィヒ郊外に住むイルゼ・キーゼヴェッターから、例年通りに、クリスマスカードが届きました。私たちの合唱団を長年識っている方々は、月報でこの友人は何度かとり上げられ、また5回の海外旅行のいずれかに参加された方は、ベルリン、ライプツィヒ、フライブルク等々の地で、イルゼを実際見かけたこともあったでしょう。

何しろ、1981年夏に、私が初めて合唱団の海外旅行の打診のためにドイツ入りをした際に、友人となった最初のドイツ人女性だったのです。機械のデザイナーとして毎日働いて、3人のお子さんを育てている未亡人で、私とほぼ同年齢。この旅行の間、私は積極的に私の拙いドイツ語を育てるのが主目的で、移動中の電車のコンパートメントやレストランの中などで、会話を試みたものでしたが、イルゼは、ドレーズデンからライプツィヒへの車内で一緒になり、ライプツィヒに着くと、ご自分はまだ少し先の郊外の駅まで行くところを、わざわざ降りてライプツィヒ市内のインターホテルにまでつき添ってくださったのです。

それ以来、合唱団の演奏ごとに、時間をさいて来てくださり、私たちの買い物の列をさばいて、注文を手際よく取りついたり、もちろん家族総出で演奏を聴かれたり、その前年ごとに私がひとりで行なう下見旅行では数日間ご自宅に泊めていただき、その他にも、夏中の長い期間、語学研修会に参加する私を住まわせて、余暇には、可能な範囲でバッハゆかりの地をこまごま

■イルゼからのクリスマスカード。
その表題はFriede auf Erden (地上に平和を)。
昨年末の《口短調ミサ》で歌った「地に平和」です。



Friede auf Erden

と廻ってくださったり、あらゆる限りの面倒を見ていただきました。

その応対ぶりは、私の中に、“ドイツ人の誠実”というものを、深く深く刻みつけてくれました。私の誕生日とクリスマスには、1年も欠かさずに、2、3日早めにお祝いのカードが届きました。私は、国内の人々にさえ、そのようなことを全うする自信がないので、いつでもイルゼからのおたよりが届いたあとの返信となり、最近では定期演奏会記録のDVDを送るようになってきました。いつも平穏で健康で旅行好きのイルゼも、日本にまでは来ることがなく、最近では体調の不安を書いていましたが、この12月、クリスマスに1日おくれて、カードが届いた時には、まだご無事で！と大いに安堵しました。

よく日本人は“おもてなし”を心がけると言われますが、このイルゼの誠意には、長い人生でたったひとり、と感じられるほどの、徹底さがあります。世代の影響と思いますが（私たちの「戦後」にあたる時期を「東側」で過ごされました）、彼女はキリスト教会に属してはいません。お子さんの名も、聖人の名などでなく、東ドイツでよくあるような名前づけとなっています。それでも、イルゼは、人間の理想のような人であり、本当に自然そのものの善人なのです。最後の海外巡行旅行は2009年でしたが、その頃にはもう親しくしたドイツ人、フランス人の方々は、ほとんど他界してしまわれ、今や唯一の外国の友がイルゼとなってしまいました。

2008年の下見旅行の折に、ストラズブールの役所で、これまた誠実に私の古い知人たちの消息を、テキパキと電話をかけ通して追及してくださった、受付の若いフランス人女性も、イルゼと同じようなすばらしい方でしたが、結果は、逝去か、遠い親戚に引きとられるかで、もうどなたにもこの世でお会いする望みはなく

Liebe Emiko,
Lieber Penny.

Ich wünsche Ihnen
und Ihrer Familie
ein schönes Weich-
nachtsfest und alles
Gute für das
neue Jahr

denke oft an unsere
gemeinsamen Treffen
zurück

Herrliche Grüße
Ihre Ilse

愛するエミコ
ケニー(健二)

あなた方と
ご家族に
美しい
クリスマスと
よい新年を
お祈りします

私たちの出逢いの
ことを なつかしく
いつも思い出します

心からのご挨拶を
あなた方のイルゼより

なっていました。

このことから、わが国の、あるいはヨーロッパでの戦争のない時期が、どれだけ長期間にわたって続いたか、という実感が、ひしひしと迫るのです。こういう民間人同士の友情こそが国際平和の条件であり、それを妨げるのが、むしろ無能な政治家たちの外交であることは、明らかです。ただ楽しむためだけの観光からぜひ、友情と平和を築く外国旅行で、人類の絶滅を救ってゆこうではありませんか。これこそが、私の世代に切実な遺言として受けとられてほしい願いです。

ありがとう、イルゼ！

注) Strasbourg は、ストラ「ス」ブルカストラ「ズ」一か、とよく話題になります。ドイツ語では、シュトラースブルクですが、フランス領にもどって後の時代のフランス国内では、特に私の接した当地では、みんなストラ「ズ」一とにごっていました。ですから、私はどれが正しいかということはなく、留学中の私の話し相手のフランス人が発音していた通りの呼びかたを、なつかしく感じて、訂正しないままに私自身は守りとおしているわけです。ご了承を……。



■イルゼ(右)と健二。
息子さんがシェフ
をしている、フライ
ブルク郊外のレスト
ランにて、2008年夏(翌
年のドイツ巡演の下
見旅行途次)

第116回定期演奏会

日時◆2018年5月12日(土)、14:00開演
会場◆武蔵野市民文化会館小ホール

カンタータ《主 われらに いまさずば》BWV 178
カンタータ《抗い また怯むは こころの常》BWV 176
カンタータ《呼びまつる イェスよ》BWV 177
カンタータ《あしたに輝く 妙なる星よ》BWV 1

光野孝子(S)、佐々木まり子(A)、黄木 透(T)
小藤洋平(B)、草間美也子(オルガン)
東京カンタータ室内管弦楽団(オーケストラ)
大村恵美子(指揮)

入場料◆前売り3500円[全席自由席]、2月1日発売
(予約◆席数に限りがあります。お早目にお申し込みを)
会場へのアクセス◆徒歩:JR三鷹駅から約13分
バス:JR三鷹駅・吉祥寺駅、西武新宿線武蔵関駅、等より
(詳細は、チラシまたはHPをご参照ください)

参加団員募集◆練習=毎週土曜/月曜。随時見学歓迎

第116回定期演奏会の曲目

“あしたに輝く たえなる星”とは何の星か?

小海 基(団員、荻窪教会牧師)

「あしたに輝く たえなる星」(Morgenstern: 暁の星、明けの明星)とは、普通ならば金星のことを指します。しかしバッハのカンタータ第1番《あしたに輝く 妙なる星よ》(BWV 1)で歌われる星は、「受胎告知の日」の星ですので、毎朝見える、太陽の昇る前、暗闇の中で他のどんな星よりも一番に輝いている金星という風に単純に言うよりも、イエス・キリストが誕生した時に輝いた特別な星、東方から占星術の学者たちを導いた不思議に輝く星を想定しなくてはならないでしょう。マタイによる福音書2章7節、16節によれば、ヘロデ大王は、学者たちから「星のあらわれた時期を確かめた」上で「ベツレヘム周辺一帯にいた2歳以下の男の子を……殺させた」(下線は筆者)のですから、学者たちの旅は2年前から、天体の異変も2年にわたって続いたということになります。

東京バッハ合唱団に入って、他の作曲家にくらべバッハ・ファンには理系の人が多いことに改めて驚かされます。キリスト教というと、中世キリスト教の天動説に固執した悪名高き「ガリレオ裁判」とか、「天地創造は7日間だ」と強要したとか、「男性の肋骨は〔神様が肋骨でエヴァを創造した関係で〕女性より1本少ない」と考えていたとか、喉ぼとけを「アダムのリンゴ」と呼んで今でもエデンの園の知恵の実が喉に詰まっていると信じているとか、「魔女狩り」……といった非科学的なイメージを持っておられる方も多いと思います

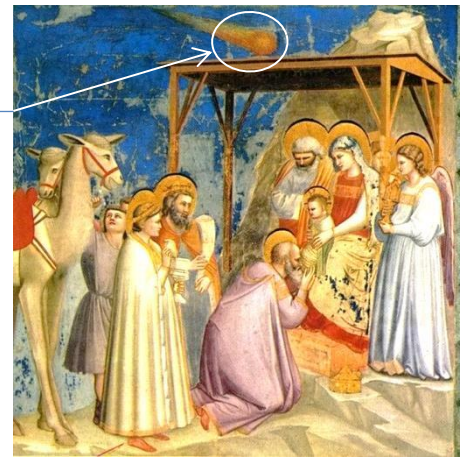
が、実はそうではないのです。惑星の楕円軌道を明らかにする「ケプラーの法則」を発見したヨハネス・ケプラーや「天動説」を唱えたニコラス・コペルニクスは修道士で、ローマ教会当局から暦の誤差を訂正して正確な物にしろという要請に誠実に応えて、発見していったのでしたし、万有引力を発見した大学者ニュートンも神学者であったことは有名です。バツハの時代にも平均律の調律法を巡ってヴェルクマイスターやいろいろな人たちがしのぎを削って競っていましたけれど、彼らは調律師ではなくて、自然界・宇宙に見られる神の調和を科学的に明らかにしようとした科学者（神学者）であって、調律法はむしろそれらの研究の副産物にすぎません。自然科学と神学は対立関係にあるのではなく、世界・自然界・宇宙の調和の中に神の存在は証明されると信じていた人たちが一方には大勢あって、その対岸に「聖書に書いてある」ことを原理主義的・教条的に振りかざし、科学の発展を阻害した教会当局の「政治家」もいて、両者しのぎを削り合っていたというのが歴史の真実です。むしろ初期キリスト教は科学的でした。さらにルネサンス期には、自分たちよりも科学的な知識をもつ古代ギリシャ・ローマ哲学やイスラム教への敬意さえ怠っていたことが修道院に残されたさまざまな記録から分かっています。

どうしてそれほどまでに科学的であることに固執したかというルーツを辿っていくと、イエス・キリストの誕生時に、東方の占星術の博士たちを導いたのが「星」であったという、冒頭に触れたマタイによる福音書の2章の記述が原因していることが分かります。ここさえ明らかにできれば、イエス・キリストが何年何月何日に生まれたのかという日付け確定の、打ち上げ決定打になるはずの記録でした。そうした努力の歴史の積み重ねの末に、本来ならばイエス・キリストの誕生日がキリスト紀元（AD）1年1月1日となるはずだったのですが、紀元後533年にそのように計算し、暦を定めたはずのローマの修道士ディオニシウス・エクシグウスが計算違いをしていたことが明らかになっています。計算違いの暦が現在でもまかり通って幅を利かせているというのは何とも皮肉な話です。そして「12月25日」だけは絶対にイエス・キリストの誕生した日ではない、パレスチナの羊飼いたちはあの季節に絶対に「野宿で羊の番」をするはずがないというのが今日「定説」となっています。

それでは、その問題の星は何だったのでしょか。一つの重要な仮説が紀元前6年に起こったらしい「惑星直列」（グランドクロス）現象で、これは火星、木星、土星……といった複数の惑星が直列に重なって不思議に大きく光るといふものです。数百万年に1度起こるか否かという現象です。これは本当にそう見えたのか検証しづらいです。もう一つの仮説が76年周期で巡ってくる「ハレー彗星」で、名前こそ17世紀イギリスの天文学者からとられていますが、1607年の接近はケプ

■屋根の上方に描かれたハレー彗星

ジョット・ディ・ボンドーネ
（1266/7-1337）
フレスコ壁画、パドヴァ・スクロヴェーニ礼拝堂



ラーも観測記録を残していますし、ルネサンスの画家ジョットーの時代、1301年10月25日の大接近の様子がパドヴァのスクロヴェーニ礼拝堂にある「降誕画」の中にもジョットー自身の手で描かれています。この周期で遡っていくと、紀元前12年10月10日がイエス・キリストの時代に最も近い大接近となります。となればこの2つのどちらか（もしくは両方）が、“あしたに輝くたえなる星”ということになるでしょう。私自身も1986年時のハレー彗星大接近を経験しましたが（あの時も「ジョットー」という名の観測衛星が打ち上げられましたね）、さすがに「2年間」とは言わないまでもずいぶん早くから長期にわたって彗星が観測できたのにびっくりしました。

ところがその日付がマタイによる福音書2章やルカによる福音書2章にやたら細々と出てくる歴史記録とぴたりと合わないのが、困ってしまうのです。ヘロデ大王の在位期間、キリニウスがシリア総督の在任期間、ローマ皇帝アウグストゥスの住民登録（人口調査）勅令、ヘロデ大王の幼児虐殺事件（これは同時代の記録に一切残っていない）といった、本来、日付確定の決定打になるべき歴史的事件とうまく合わないため、今だにイエス・キリストの誕生年月日が確定できないのです。2000年前のことですからこれだけでも誤差の範囲といえなくもないのですが……。

◆ “あしたに輝く 妙なる星”のことは、先月号に《口短調ミサ曲》公演と杉並の思い出をお書きくださった佐治晴夫様（ご自身の北海道・美瑛町の書齋を“美宇天文台”と名づけていらっしゃる）にも、年末にお電話でお尋ねしました。さっそくメールで以下のご返答をいただきました。「先日、お申し越しになった、BWV 1 にでてくるMorgenstern ですが、おそらく明けの明星、金星だと推測してもよいと思います。最大光輝の時期の金星です。そのほか、考えれば、ベツレヘムの星についての私の推敲にもあるのですが、惑星集合、彗星、超新星などがあり、惑星集合につきましては、[聖書に記述の]時期がはっきりしないので、なんともいえず、超新星については、肉眼的に輝く現象は起こっておりません。また、目立った彗星の出現もありません。したがって、最大光輝時期の金星であると考えてもよろしいと思います。」

なお、当月報（巻頭）にご寄稿くださった佐治順子（のりこ）様は、晴夫先生の奥様です。ご両者に深謝（O.E）